

書評:阿部武司『アーカイブズと私—大阪大学での経験—』

大阪大学共創機構社会学共創本部 教授 菅 真城

本誌の読者には、著者の阿部武司氏（以下、普段どおりに「阿部先生」と呼ばせてもらう）は、元大阪大学文書館設置準備室長、元大阪大学アーカイブズ室長としておなじみであろう。本書は、阿部先生が「大阪大学大学院経済学研究科に教員として在職していた二一世紀初めごろの十余年間に執筆し、あるいは後に当時を振り返って書いた大学や学界に関するエッセイをとりまとめたもの」とのことである。大阪大学アーカイブズの設置についても多くのページが割かれている。まず、本書の目次を示す。

はじめに

- 第一章 図書館・博物館・文書館
- 第二章 企業アーカイブズと大学
- 第三章 大学アーカイブズと企業アーカイブズ—現状と課題—
- 第四章 アーカイブズ創設とアーキビスト
- 第五章 大阪大学アーカイブズの構築
- 第六章 日本の官公庁における文書保存
- 第七章 外国のアーカイブズ
- 第八章 大阪大学経済史・経営史資料室
- 第九章 社会科学研究的国際化
- 第一〇章 読書の効用

本書は阿部先生の経歴に従って書かれたものだけに多様な論点を含むが、筆者が気になった事柄を列記する。

第一に大学アーカイブズ論として。これまでの大学アーカイブズ論は、筆者をはじめとして、実務者の立場から論じられてきた。一方、本書では、初めて管理者の立場から大学アーカイブズ論が論じられた。大阪大学アーカイブズがどのようにして出来上がったのか、つぶさに知ることができる。例えば、「大阪大学アーカイブズ」の「アーカイブズ」と言う名称がなぜ採用されたかについて学内事情を赤裸々に告白している（60頁）。本書各所で、阿部先生がどのようにして大阪大学アーカイブズを作

り上げたかが述べられている。管理者として大学アーカイブズ設立の役割がまわってきた教員には大いに参考になるであろう。筆者の印象でいうと、阿部先生は口は出さないが責任は取るという、理想的な上司であった。「第五章 大阪大学アーカイブズの構築」の初出は、『大阪大学文書館設置準備室だより』『大阪大学アーカイブズニュースレター』であるが、その時々での学内の課題に理論武装しようとしたことが懐かしく思われる。

第二に企業アーカイブズ論として。経済史・経営史研究者として、また企業史料協議会副会長として、企業史料を利用する立場から国内外の企業アーカイブズについても多くのページが割かれている。

第三にアーカイブズの国際比較として。社史・団体史の執筆と英米における企業史料保存の視察から、「日本では官庁の縦割り行政の弊害と思われる図書館・博物館・文書館という硬直的な区分が、英国では柔軟に使い分けられており、図書館とアーカイブズの共存がごく普通にみられること」（18頁）、「企業が消滅した場合でも大学附属図書館や国公立の文書館で、同じく専門家を置いてきちんと保管・公開すべきであること、日本では、とくに国公立機関において図書館・博物館・文書館を硬直的に区別するが、この点は状況に合わせて柔軟に対処するべきであって、担当者が仕事をしやすく、また利用者が使いやすい施設の構築を目指すべきであること」（20頁）が指摘される。いわゆるMLA連携に関わる重要な論点であろう。ただ、英米と比べて日本でのMLA連携がうまくいかない点について、図書館と博物館の運営にも携われた阿部先生なら、さらに突っ込んだ論述が欲しかった。もっとも本書が「大阪大学での経験」であるから、筆者も大いに反省せねばならない。

また、海外のアーカイブズについても多く紹介されており、それに対して日本の官庁の文書保存（第六章）には悲しいものさえあった。

第四に教養の重要性である。「第一〇章 読書の効用」では、深い思考の基礎としての読書の重要性が語られ、「第九章 社会科学研究的国際化」では、外国語を用いた国際共同研究のあり方について論じられている。つつい外国語を避けてしまう筆者にとっては、反省させられるところ大である。

多くの読者が疑問を持つであろうとして大阪大学アーカイブズが設置出来たかという、阿部先生が「とにかく八年間余りも頑張ってきたのだから」（61頁）ということに尽きると思う。現在、国立大学86大学中、「国立公文書館等」を有する国立大学は12大学しかない。この状況を克服するには、学内的にも、対外的（対内閣府）にも大きなハードルが存在するであろうが、第二、第三の阿部先生が出現することを願って、擲筆することにする。



出版社：クロスカルチャー出版
発行日：2020年2月29日
定価：2,000円＋税
ISBN：978-4-908823-67-1

阿部武司『アーカイブズと私—大阪大学での経験—』を推薦します

九州大学 記録資料館教授 三輪宗弘

深い蓄積、鋭い読み、幅広い視野から繰り出される英知を、本物を探し求めている読者諸賢に一献いただきたい。

阿部武司先生との初めの出合いは、東大の中村隆英先生のゼミであった。中村先生の質問に「次から次へと的確かつ具体的な答える」若き阿部助教（現助教授（筑波大学）に、ここまで資料を読み込んでいる博覧強記な研究者がいるのだと正直に思った。「隆英先生」の「甥しそうな、満足のたぞ」という顔を今も鮮明に思い出す。35年ほど前になる。

阿部先生の研究スタイルは、先行研究の網羅的な読み方、資料の徹底的な読み込みである。学術書の註にあげられた文献はすべてチェックするだけで満足せずに、すべて読まないと納まらないのである。一点一点鋭く批判の目を向けながら読み進めていく。理論を振り回す研究者には批判的で、一刀両断で切り抜いていく。外国の研究者の物真似や流行する学説に飛び乗った迎合者にも情け容赦ない評価が下る。

一節をこぼす。産業集積に関する研究では、自分で積み上げた研究を土台にして、思索に基づく、膨大な文献と資料の読み込みを裏打ちされた、日英の産業集積の比較が行われる（本書では直接触れられていないが、読者は阿部先生の積年の研究を手にとられた）。小生の父親は、伊藤忠と丸紅という商社の庇護のもと、毛織物業でそれなりに成功したが、小生は父の家業を継がなかった。繊維産業だけは研究するのだけは「やめよう」と誓ったのだが、小学校2年生から重たいものを持ち運ぶので、体に染み付いたものがあるのだろう。阿部先生の商社の役割に関する指摘は、父をみているだけにその通りだと思った。

阿部武司先生は研究だけでなく、一つの考えに囚われることなく、様々な意見や意見を汲み上げ咀嚼するというスタイルで、大学行政にも邁進した。常にプラス思考である。阪大の近代経済学の大家とは異なるスタンスで、広く意見を聞き、思慮し、進むべき方向を構築していく。一旦決めたら粘り強く説得する。「大阪大学アーカイブズの創立」に関する記述を読まれた。

アーカイブズや記録管理の学問分野の中で、阿部武司先生の本書の果たす役割は大きなものがあるだろう。若手研究者の必読の文献である。

「アーカイブズと私—大阪大学での経験—」要約
アーカイブズが多様な情報源として研究者にとってはもちろんのこと、内外の行政に携わる人々、さらには一般の人々にも欠かせない機関であることは国際的常識となっている。ところが最近の日本では、政府が都合の悪い文書を隠蔽・廃棄・改竄するといった嘆かわしい事態がまかり通っている。日本人は、記録をきちんと残すアーカイブズの重要性を今こそきちんと認識しなければならぬ。著者は、一九八八（昭和六三）年に以来二六年間、大阪大学で経営史を学んで教える（平成一〇）年に、大阪大学内にアーカイブズを設置するといった任務を負うことになり、一〇年がかりでそれを実現した。本書は、手探りで進めていったその過程を当時発表したエッセイを通じて明らかにし、近年日本の大学で関心を集めているアーカイブズの設立の一例を示すものである。著者は、手探りで進めていった大阪大学で、図書館や博物館の運営にも携わり、また学外で企業アーキビストの団体と関わった。本書は、それらの経験にも言及するとともに、深い思考の基礎としての読書の重要性を語り、さらに、日本では理科系学問を偏重する政府の意向により存続すら危惧されている文書系学問が人類の発展に不可欠であること、しかし、日本語の壁に守られたその閉鎖性には障かす問題があり、その克服策として翻訳の奨励を含む、国際化への対応が重要であることを訴える。

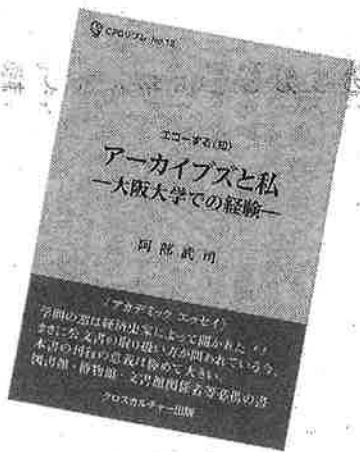
書評

▼阿部武司著「アーカイブズと私—大阪大学での経験—」2・29刊、A5判一八六頁・本体二〇〇〇円・クロスカルチャー出版

アーカイブズは 思索するための宝庫

まず、自分たちで資料にあたり、考えていくことに尽きる

室沢 毅



著者は大阪大学に在職中、二〇〇四年から「大学のインフラ」といふべき図書館、博物館として「アーカイブズ」(文書館)の学内運営に関わり、(略)「アーカイブズ」の設立という重責を担いながら、二年一〇月、大阪大学「アーカイブズ」の創設を実現させた。その間に執筆した論稿とその後に発表した講演録や論稿をまとめたのが本書である。ところで、「アーカイブズ」は、通例、使用される「アーカイブ」の複数形であり、NHKなどでは「アーカイブ」と称しているが、これは発音がしにくいという点で、敢えて「ズ」としている造語のようだ。また、図書館に関する職種を司書、博物館なら学芸員という

名称があるが、「アーカイブズ」には、「アーキビスト」と称するだけで、訳語がない。著者は「アーキビスト」の仕事は、「資料や情報の提供」をすることであって、「予算や人事(ポストの数)」、「大学史や社史の執筆」をすることではない」と述べていく。それは、「アーカイブズ」は社史や大学史の編集委員に資料を提供するところであって、それらの執筆を依頼すべき所ではない」という明確な捉え方を著者が持っているからだ。ここ数年、安倍政権に関する疑惑で公文書の書き換えや廃棄といった不祥事が頻出し、直近の文書を廃棄することはありえないことだ。それは、日本の公権力の

歴史的負の継承といえそうだ。「日本という国は、多くの諸外国とは逆」、歴史的資料の保存にはまことに消極的だ。それは明治維新期や終戦時に実施された大量の文書の焼却処分にも現れており、(略)情報公開法も企業や官庁では資料の廃棄を促進しているように見受けられる。こうしたことが進められ、過去の歴史に対する客観的な評価が不可能になり、私たちが日々苦勞して積み上げてきた貴重な知恵も忘れ去られてしまひ、将来に禍根を残すことは明白です。「日本人は国際的にみれば、過去のことは「水に流す」という文化の中で生きています。うである。しかし世界では、栄光に満ちたことであれ反省すべきことであれ、過去の出来事を絶えず思い出し、それを現在そして未来に生かすことに務めている国が少なくない。欧米先進国のみならず中国や韓国などでも過去の記録を文書館にきちんと残しているのであり、そこに保存された、信頼に足る資料に基づいて歴史を記述することがしばしば伝統となっている。近年の教科書問題で、中国や韓国から寄せられた、戦前・戦中における日本の侵略行為に対する批判に日本政府が適切に対応できないのは、自国の過去に関する思索が日本人は希薄であるという重要な問題と関連している。「多くの海外諸国では保存年限を過ぎた公文書は、日本のように簡単には廃棄されず、その多くが文書館に移されて選別・保存・公開されることは常識となっている。他方、日本では(略)都合の悪い文書を大量に廃棄することが不思議とも思われてこなかった。」

その通りだと思うし、そうであるべきだともいいたい。このように「アーカイブズ」の重要性を的確に著者に述べてもらえば、補足することは何もない。確かに、わたし自身も図書館や博物館(あるいは民俗学的な資料館)の重要性は直ぐにでも述べられるが、公文書館のような施設については、あまり関心を抱かなかったし、なにもその実態を知らずに、その時々公権力に対して従順に選別して収集しているのしか思えなかったといえる。だが、著者が述べているように確かに、都合の悪いものは廃棄するということは、やってきたとしても、もうならないかたちで管理・運営していくことを目指すべきだと、わたしも思う。「自国の過去に関する思索が日本人は希薄である」という重要な問題」と著者は指摘する。もう少し付け加えるとすれば、簡単に捏造、書き換えされたものを事実として認識せられてしまうということもある。それは、特に紙媒体に当たることなく、氾濫するNet情報に混乱しながらも、道筋を自らつかめなうまま、偽情報を真実として感受していくということを意味する。

まず、自分たちで資料にあたり、考えていくことに尽きると思う。そうすれば、「アーカイブズ」というものは思索するための宝庫だといえる気がする。(社会批評)